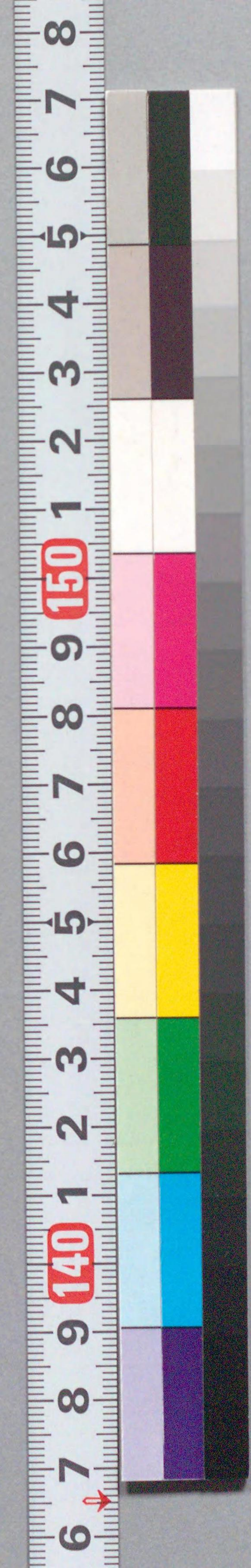




春色籬の梅

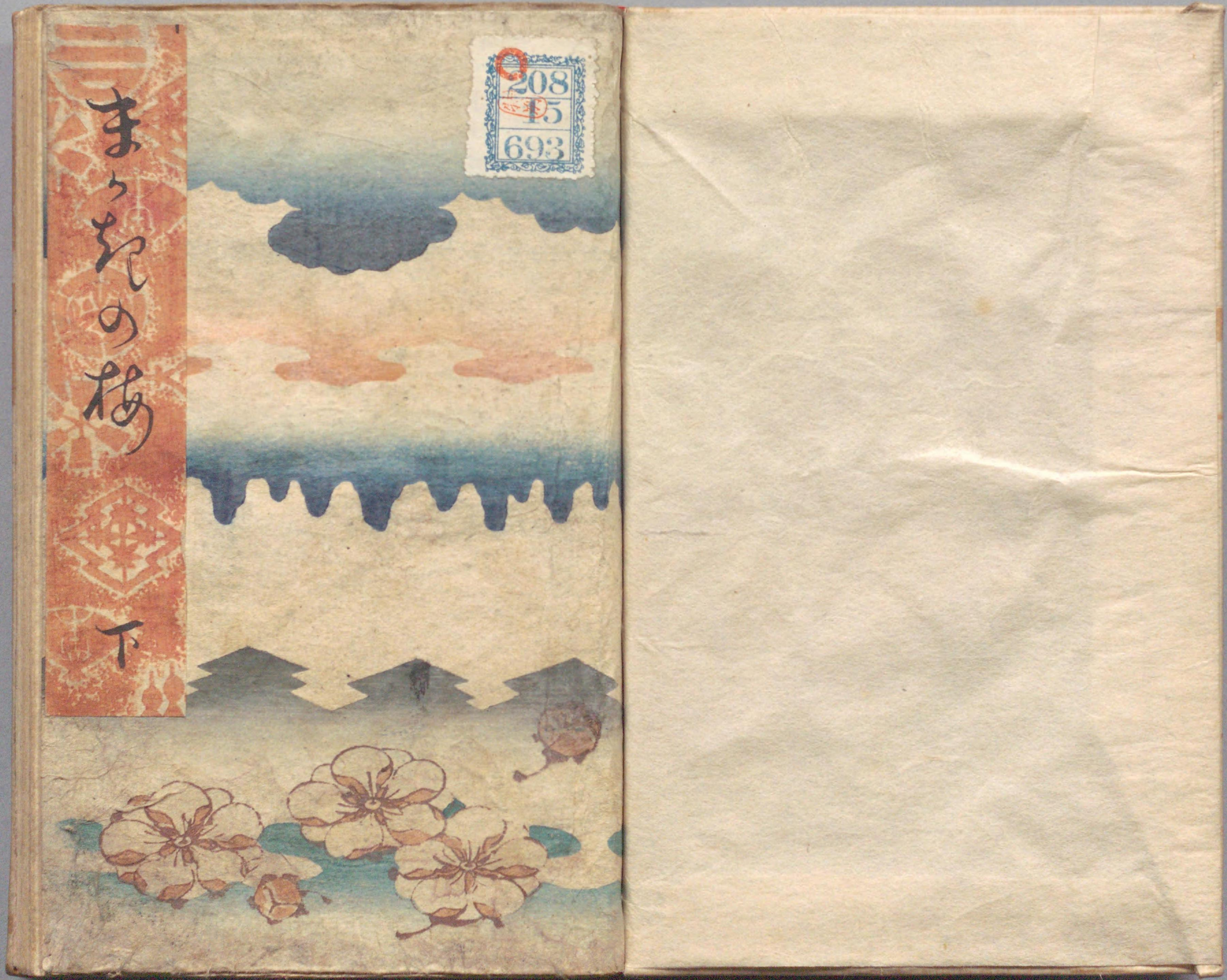
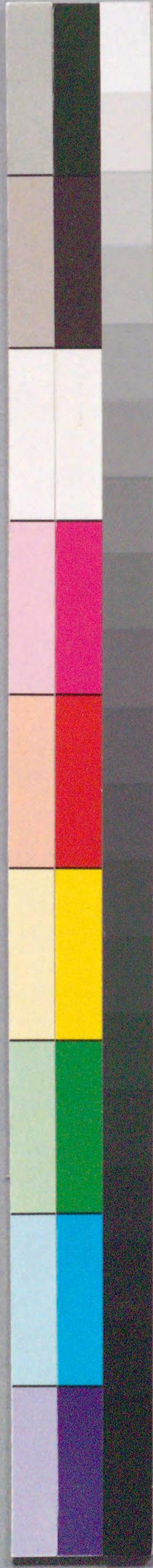
三

208
15
693



国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用



国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用



春色籬の梅卷之三

江戸 烏永春水著

第五回

再洗鳥推ハ小濱を尋極て庄の森の庵小のりり新き人ハ
まゝして石園も千鳥に各射面てまに身の上さうさうが
いふいふ思も虫も其身も妻を侍しとまを六明しうねて彼是と
言紛らせて心しを腹之云ららつ小濱の岸を今うくと
侍居る中子鳥の積進の葉自ら夕膳を備て鳥推は食





人をよと戻らら其氣を待て居て男んか 小一に立宿して
清きすはりの先達て 月限か海がさきよ今の 内宿持
さあぐけ舟入出限居るのふとをして下下てさく入
あつまぶわい早のううけ庵へ同居して時能を待て居る
その中へ是れ尋ねて来る者があつてあつて時入直に
のちをさるううと病終ううわいも早くお茶さんよ逢友の
と幸防して居るこんであつて戻らぬのうけ旅のめづるを合てうう
ナニたるはすはりのゆでも是れお茶様と同道に於て

アキキウツスル

左振してお呉るまのヨト身性の類我見つめて居るその
類を身性も情と見惚るううかの中にうう我うう我男の
出へ元来深く迷ひし申被落雲う類ううの似て
さえ勘氣をうけううを身と落うせし出濱るま魂も
うううをううと被後せしううを抱あひる折らう 女男ハ 隔
紙を明てまし出濱さんまトハのあつてうううううう
理もあひが傍らしひね入ト元の産あへうううう 梅ハヤカハ
先利うう被行の受を圓くと思つても圓がうううう

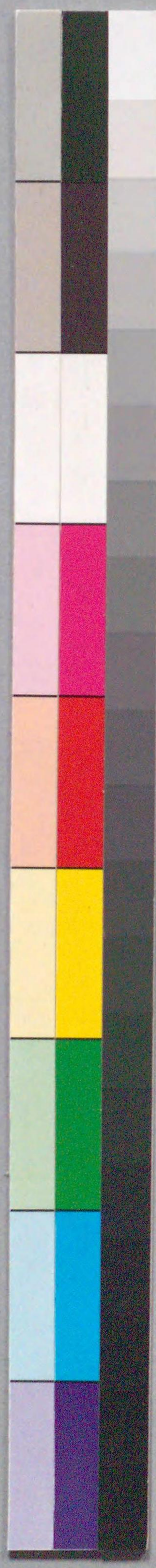


庵下夜を明く翌日庵主の屋公の帰るまで
 始終を考てのまゝのまゝを預ひけるふえ末恨も
 なくしる屋公も早業に因縁のあひ松が意より
 両女小侍の内平人を振うる中演とあ身は後末の
 ままでも教刺あやてぬいふを賜ふけりて
 恵みの終を淡まう中よて梅里と喜き布小侍
 暫時鳥雅小引別は先達て東の空へおまけけり鳥
 雅ハ江の空へ浮きけり

マカシウメニナク

第六回

夢の人の金のころ下とてさうせり
 八橋舎の戯れ哥も思ひ入るる
 をも潤らうと
 中演と中鳥入るる梅里の隠居行に
 其のまゝそのまゝの情入るる
 其のまゝそのまゝの情入るる
 其のまゝそのまゝの情入るる



鳥と由廣と婢女の... 淋... 春の日は...
うねてまけるが... 湯の湯... 湯...
椽側... 湯...
扱... 湯...
宅... 湯...
松連の... 湯...
何の道... 湯...
舎... 湯...

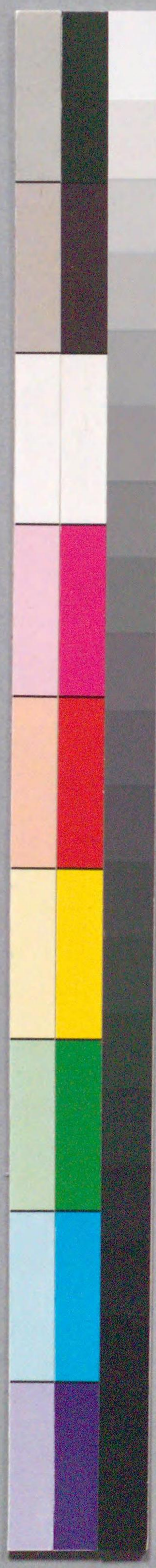
ら... 湯...
お... 湯...
でも... 湯...
ま... 湯...
さ... 湯...
あ... 湯...
何... 湯...
あ... 湯...

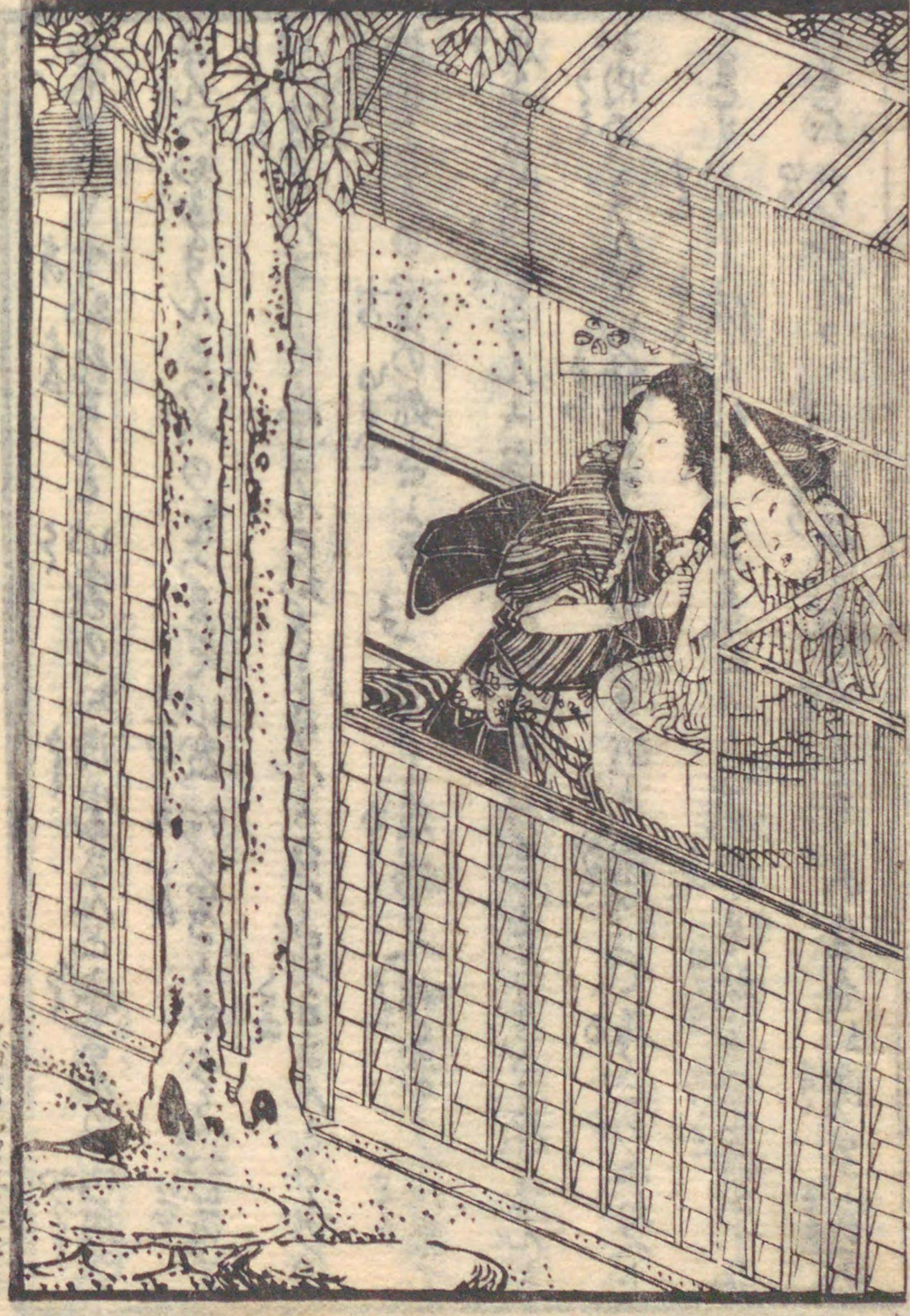
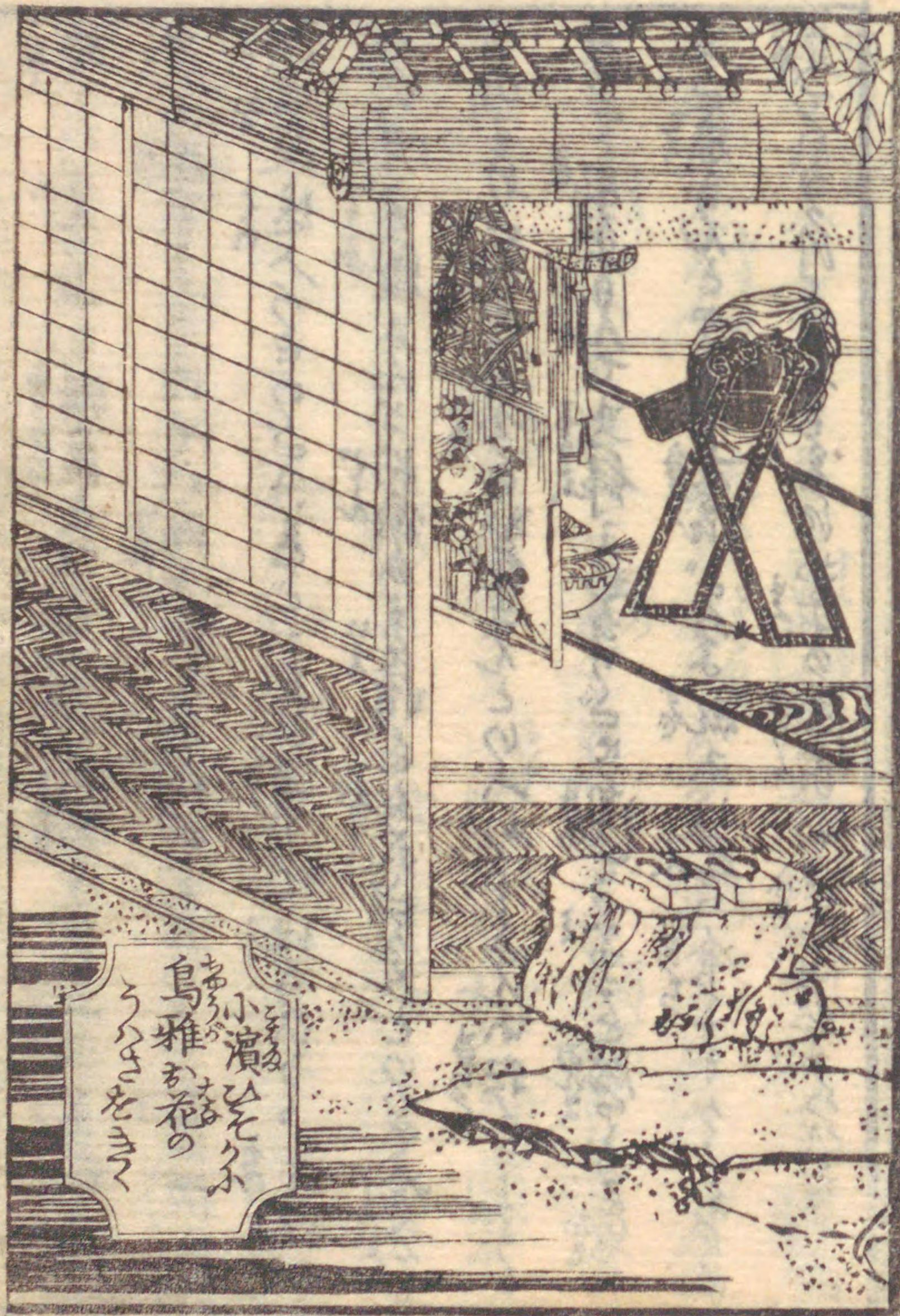


てお前の節の分持も早く帰るお前のたづねに
あてお前の頼みの人トいふ少濱の浜を眼あうりて
かー梅一とつよ 小ア子も鳥さん左様りつてお茶を
梅一けいも免とて建入の節も鳥さんのお茶の
梅一りも 各々も鳥さんせめてお茶の身
松一りのついで居る梅一も鳥さんお茶の
鳥さん 小ア子鳥さん子相取町も居る鳥さんのお茶さんと
お茶の節の梅一さんの節りつてお茶を飲してお茶の

梅一さん

お茶の節の分持も早く帰るお前のたづねに
あてお前の頼みの人トいふ少濱の浜を眼あうりて
かー梅一とつよ 小ア子も鳥さん左様りつてお茶を
梅一けいも免とて建入の節も鳥さんのお茶の
梅一りも 各々も鳥さんせめてお茶の身
松一りのついで居る梅一も鳥さんお茶の
鳥さん 小ア子鳥さん子相取町も居る鳥さんのお茶さんと
お茶の節の梅一さんの節りつてお茶を飲してお茶の





たゞして腰を辛うらむは海舟乗船の事

多しんく考へて見るを悔くきりてまき尺が何振くう宜
らふね入小刀まおするが経るよ何でもけ方が梅里さん不任
おと何振くてもお茶と私に込ら勝もごううけ何ふか
あて居るよ鳥の雅さんも様う呼びて不來お茶もまき
さん不達多の申ふ何折う何いせ別あうう入てまき上ごあ
よと徳さんをゆでうお茶の存かとおまなね入私も鳥雅
小男ふさる恨み候うてう入本家へまわらむまき私
私め

あかきん三十

方へむらうり何付てまき四動造さあよ観さのまきまき
思ふうお茶も左振もあままき山濱さんが瑞く
喜地悪根生をまきお茶の鳥雅さん十分何うまき
あまごう左振もあまごうけまき私左振のあま
まき何振もまき遠くしよ止ふくまううぬはまひとい
氣ごちちち強ひまきりらまらごううが私ハ何振くま
小忠さん離別さのハあまごうううままきまきまき
の入まき私も何うううう何振くまきあまの何切

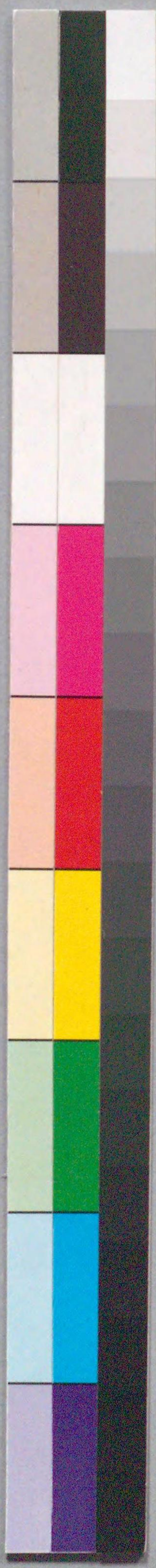


野のうら正室のお内室さんよりうらさのヨロでも男と
 りのの押通して側よ居る女共は海へ男の多ひで別室の
 何れしそららひのうら自中の逢逢さるひとを理するを
 も逢ふ来らるものごうらゆでもすけだのそら松のす
 ふれそよ敷しと風をそと見えうけあつてお茶が深く煮
 がまらる梅よりうら一松もまご鳥雅らんよ無をよま
 樂しゆら所へく久しく幸訪しと居る甲斐がらひのそ
 水一花咲せる氣づくも意友お茶も左様して中見むト
 春のうら

春のうら

春のうら 鳥推が藤とそひぬらう輝くをうら一
 お花お茶の意あうそひよむをそらおもむを落雲の
 一掃考とそらうく三編三梅小撥も清ひてお板延引
 きく直に登らうら

春色籬の梅卷之三了



遊仙 奇遇 錦乃里 狂劇亭戲作 全本十五冊出来

江戸戲作者 爲永春水

江戸繪師 歌川國直

廓乙雪 巽々 金梅 春色霞如紫 爲永春水作 全十二冊

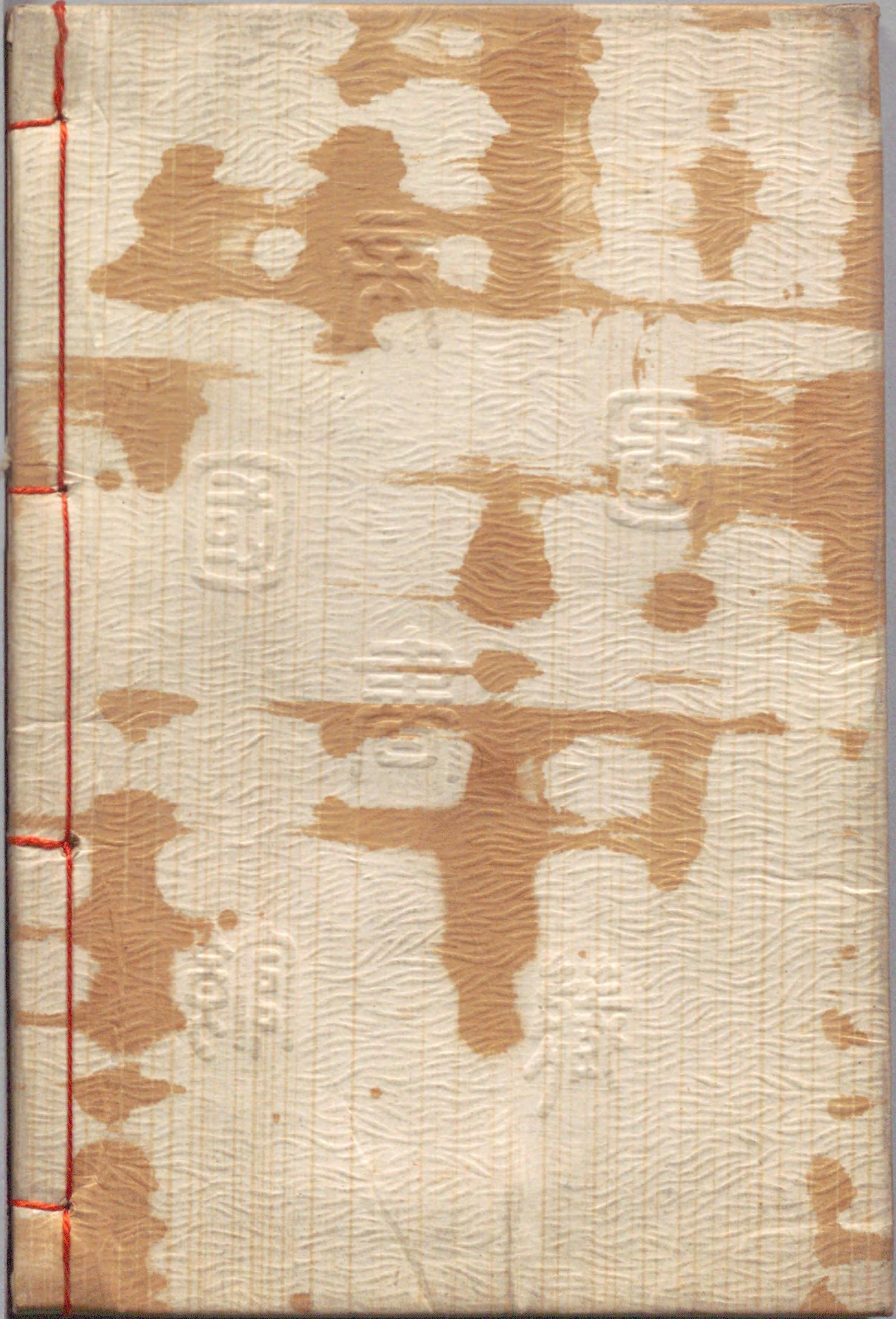
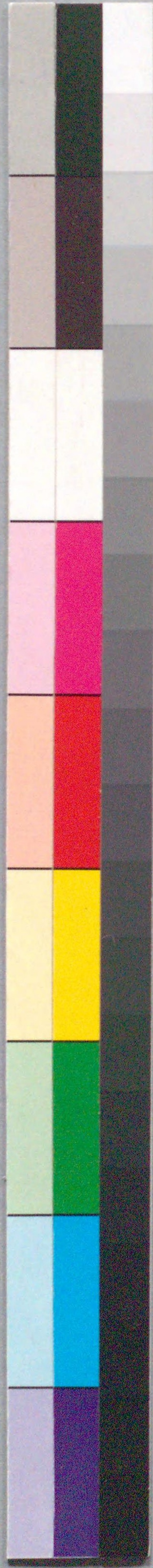
マカキウツニナナナ

かんのこま玉 玉匱保赤圓 小包 五百銅 半包 二百銅 一包 一百銅



208
15
693





国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用